

小学生は、Yes/No 疑問文に正しく答えられるか —正確さの改善をはかる実践を通して—

犬塚 章夫

外国語教育講座

How Elementary School Students Answer Correctly to Yes/No Questions: Through Activities to Increase Accuracy

Akio INUZUKA

Department of Foreign Languages, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

要 約

本研究では、犬塚(2023)の結果を受け、正確さを改善する取組を実践した結果を分析した。犬塚(2023)では、先行研究として Richards(1977)の6分類を用いて小学生のYes/No 疑問文に対する応答を分析している。6分類とは、分類1 (Yes/No だけの応答)、分類2 (Yes/No に続けて問いとなる疑問文の動詞か助動詞の繰り返しを含む文による応答)、分類3 (Yes か No に続けて、新たな追加情報が付与された応答)、分類4 (Yes か No はなく、問いとなる疑問文の動詞か助動詞が繰り返される応答)、分類5 (Yes や No、あるいはその中間の意味の類義語での応答)、分類6 (文脈によって間接的に肯定か否定かを示す応答)である。小学生の応答では、分類としてもバラエティに富んだが、文法的な間違いが多く見られた。学習している過程であることもあり、文法的な間違いを減らすための取組を行い、再度同じインタビューテストに取り組ませ、その変容を調べた。その結果、児童が授業の中で耳慣れている表現でルールが理解しやすいものについては、大きな改善が見られたものの、まだ学習して間もなく耳慣れしていない表現では大きな改善には至らなかった。表現の学習を積み重ねながらも、児童の実態を踏まえ正確さの改善を目指した指導の工夫を続けていくことが必要である。より一層、児童の実態把握と改善のための手立てを明らかにするのが今後の課題である。

Keywords : Yes/No 疑問文 応答の仕方 小学生の実態

I はじめに

令和2年度より実施されている学習指導要領において、指導すべき領域の「話すこと」が「話すこと(やり取り)」と「話すこと(発表)」に分けられ、スピーチのような自己表現活動にあわせて、即興で思いを伝え合うやり取りの能力が強調されている。筆者は、犬塚(2023)において、小学生がいかに疑問文、特にYes/No 疑問文に回答しているかの実態を調べた。小学生の実態としていくつかの特徴を見ることができたが、その中でもYes/No 疑問文に対する応答において、Are you~?で問われてもCan you~?で問われても、Yes, I do.と答えてしまう現象が見られた。本研究では、その実態を踏まえ、明示的にドリル的な学習に取り組ませることで、正しい反応を学ぶことができるのか、明らかにすることを目的としている。

II 研究背景

1 Richardsの6分類

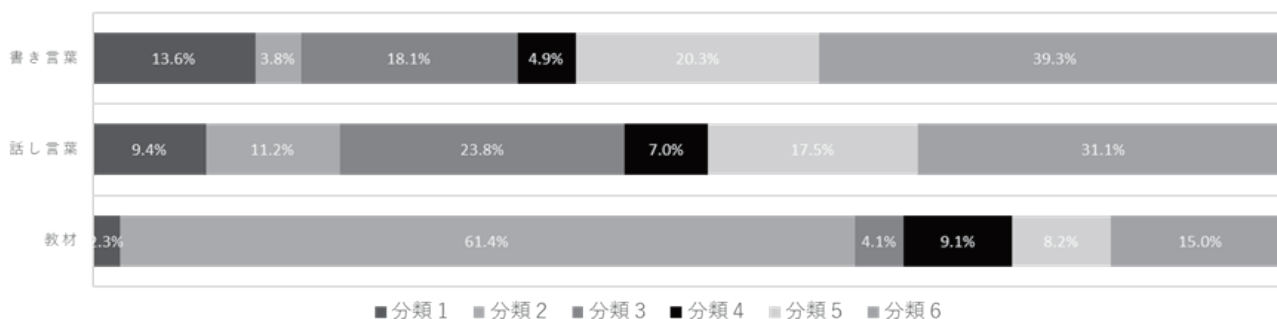
Yes/No 疑問文の応答の仕方では Richards(1977)の6分類に着目をした。Richardsは、様々なYes/No 疑問文に対する答えを6つのタイプに分類し、小説や戯曲に現れる「書き言葉¹」、学生へのインタビューをデータとした「話し言葉²」、そして6冊の教材³の中にどのくらいの頻度で現れるかを分析している。6つの分類は表1の通りである。

Richardsの調査結果は図1の様であった。教材では分類2が最も多いが、書き言葉や話し言葉では、分類1,3,5,6が多く、分類2は、かなり少ないことがわかる。Yes/No 疑問文の応答の仕方として、分類2のYes, I do./No, I don't.などの形を基本形としてまず教材の中で学ぶが、実際に自然な会話の中では、分類2の答え方はあまり用いられていないことを示している。

表 1. Richards の 6 つの分類

分類名	説明	Richards(1977)に挙げられた具体例 (一部)
分類1	YesかNoだけの応答	Don't you like to sit on the floor? No.
分類2	YesかNoに続けて問いとなる疑問文の動詞か助動詞の繰り返しを含む文による応答	Didn't we have a class or something together? Yes, we did. Is there to be mass in the morning, father? Yes, there is to be mass.
分類3	YesかNoに続けて、問いとなる疑問文の動詞か助動詞の繰り返しではなく、新たな追加情報が付与された応答	Aren't you going to have any? No, I never eat asparagus.
分類4	YesかNoはなく、問いとなる疑問文の動詞か助動詞が繰り返される応答	You are not going? I am.
分類5	YesやNo、あるいはその中間の意味の類義語での応答	Are you feeling all right? Of course, durling.
分類6	文脈によって間接的に肯定か否定化を示す応答	Has something happened, mother? I'll be all right in a minute.

図 1. Richards の調査結果



2 小学生の Yes/No 疑問文への応答

犬塚(2023)では、Richards の分類を用いて、日本の小学生 (5/6 年生) の Yes/No 疑問文に対する反応の実態はどうであるかを明らかにしている。自由な会話を長時間行うことが小学生には難しく、会話文の分析も難しい。そのためにインタビューテストを用いて、疑問文のやり取りの仕方の実態を調べている。児童と ALT との 1 対 1 の会話形式で、図 2 にあるような絵を見せながら、ALT から 10 の質問 (表 2) を行い、児童がそれぞれの質問にどう答えるのかの実態を調べる調査である。

図 2. インタビューテストで使用した絵



表 2. インタビューテストで使用した疑問文

番号	疑問文	想定される応答
1	Do you like English?	Yes, I do. / No, I don't.
2	Are you hungry?	Yes, I am. / No, I'm not.
3	Can you play the piano?	Yes, I can. / No, I can't.
4	What food do you like?	I like (curry and rice).
5	When is your birthday?	My birthday is (December 20th).
6	Who is this?	He is Doraemon.
7	Where is he?	He is on the desk.
8	Can he fly?	Yes, he can. / No, he can't.
9	How much is it?	It's 200 yen.
10	Is this your pen?	No, it isn't.

この研究では、このやり取りの中で、Yes/No 疑問文に関する返答 (番号 1, 2, 3, 8, 10) のみを分析している。(以後、説明内の混乱を避けるため、これら 5 つの疑問文を①Do you like English? ②Are you hungry? ③Can you play the piano? ④Can he fly? ⑤Is this your pen?と○付の数字で表記する。) インタビューテストの結果は、図 3 と表 3 の様になった。Yes/No 疑問文に対して、分類 1 や分類 2 で返答をするケースがほとんどであるが、分類 3~6 についてもいくつかの例が見られている。疑問文番号①②③と④⑤では難易度の差がある。①②③の疑問文では主語が you であるのに対し、④では主語が he、⑤では this になっている。そのため疑問文①②③では、分類 2 が 30%以上あるが

図3. Yes/No 疑問文への応答 各分類の割合

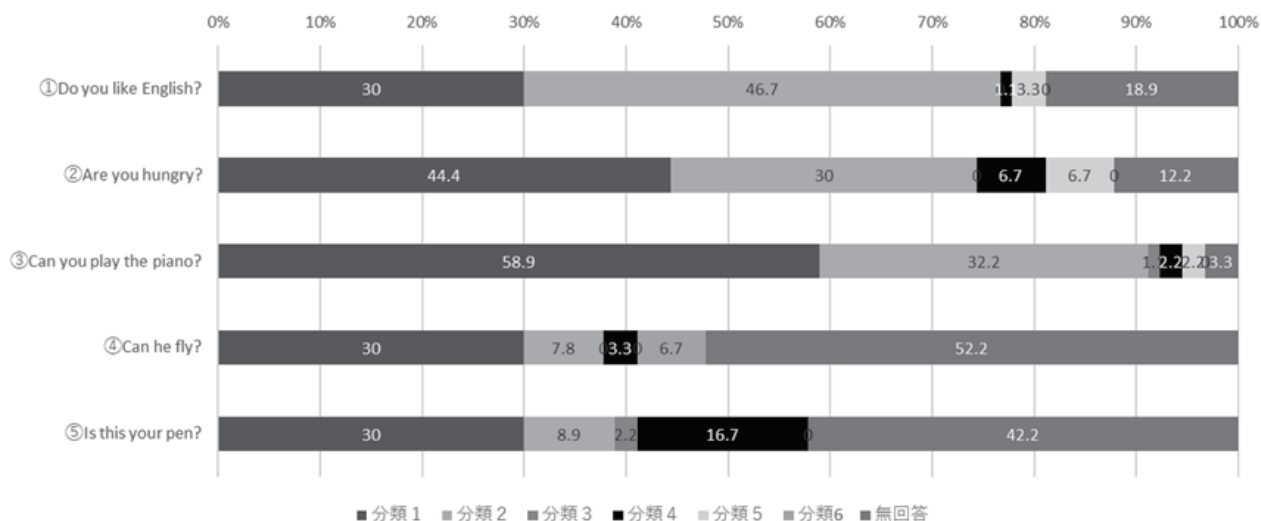


表3. Yes/No 疑問文への応答 応答数と割合 (%)

ALTの質問	学年	分類1	分類2	分類3	分類4	分類5	分類6	無回答	合計
① Do you like English?	5年	13 (28.3)	22 (47.8)	0	0	0	0	11 (23.9)	46
	6年	14 (31.8)	20 (45.5)	0	1 (2.3)	3 (6.8)	0	6 (13.6)	44
	合計	27 (30.0)	42 (46.7)	0	1 (1.1)	3 (3.3)	0	17 (18.9)	90
② Are you hungry?	5年	22 (47.8)	13 (28.3)	0	3 (6.5)	3 (6.5)	0	5 (10.9)	46
	6年	18 (40.9)	14 (31.8)	0	3 (6.8)	3 (6.8)	0	6 (13.6)	44
	合計	40 (44.4)	27 (30.0)	0	6 (6.7)	6 (6.7)	0	11 (12.2)	90
③ Can you play the piano?	5年	25 (54.3)	17 (37.0)	1 (2.2)	0	1 (2.2)	0	2 (4.3)	46
	6年	28 (63.6)	12 (27.3)	0	2 (4.5)	1 (2.3)	0	1 (2.3)	44
	合計	53 (58.9)	29 (32.2)	1 (1.1)	2 (2.2)	2 (2.2)	0	3 (3.3)	90
④ Can he fly?	5年	12 (26.1)	1 (2.2)	0	0	0	4 (8.7)	29 (63.0)	46
	6年	15 (34.1)	6 (13.6)	0	3 (6.8)	0	2 (4.5)	18 (40.9)	44
	合計	27 (30.0)	7 (7.8)	0	3 (3.3)	0	6 (6.7)	47 (52.2)	90
⑤ Is this your pen?	5年	11 (23.9)	5 (10.9)	0	7 (15.2)	0	0	23 (50.0)	46
	6年	16 (36.4)	3 (6.8)	2 (4.5)	8 (18.2)	0	0	15 (34.1)	44
	合計	27 (30.0)	8 (8.9)	2 (2.2)	15 (16.7)	0	0	38 (42.2)	90

表4. Yes/No 疑問文への応答 分類2の間違い例

ALTの質問	分類2 回答数	うち、間違い数 (分類2に対する割合(%))	正しい回答	間違い回答(個数)
① Do you like English?	41	0	Yes, I do. No, I don't.	-
② Are you hungry?	27	17 (63.0)	Yes, I am. No, I'm not.	Yes, I do. (8) No, I don't. (9)
③ Can you play the piano?	29	18 (62.0)	Yes, I can. No, I can't.	Yes, I do. (2) No, I don't. (14) Yes, I am. (1) No, can't. (1)
④ Can he fly?	8	2 (25.0)	Yes, he can. No, he can't.	No, he isn't. (1) No, I don't. (1)
⑤ Is this your pen?	10	6 (60.0)	Yes, it is. No, it isn't.	Yes, I do. (3) No, I don't. (3)

疑問文④⑤では、極端に少なく10%に満たない。またこれらの傾向は、5年生でも6年生でも同じように見られるのも特徴的である。そしてどの疑問文についても、まだ英語の学習が始まったばかりなこともあり、Richards(1977)の話し言葉の割合(図1)とはかなり様子が違っている。

加えて、応答の内容を詳しく調べてみると、分類2の回答例に多くの文法的間違いの傾向が見られた。分類2の間違い例をまとめたものが表4であるが、Are you～?に対しても、Can you～?に対しても、Yes, I do.と返答をする例が多く見られた。疑問文②③⑤の間違い割合は60%を越している。これは英語入門期特有の傾向なのであろう。

3 リサーチクエスチョン

Do you like ～?の疑問文は、小学校3年生(Let's Try!1 Unit4)において初めて学習し、Do you like soccer? Yes, I do. / No, I don't. の様に分類2の形式で何度も練習している。その後、3年生(Let's Try! 1 Unit 9)でAre you a (rabbit)? Yes, I am.を学び、5年生(New Horizon Elementary 5 Unit4)でCan you play volleyball well? Yes, I can. /No, I can't.を学習するものの、定着が十分はかかれていないため、3・4年生で繰り返し使ってきたYes, I do./No, I don't.に引張られて間違っして使ってしまうのではないかと考えられる。特に小学校では、文法を明示的に教えないため、チャンツなどの音声で学んだYes, I do./No, I don't.のリズムが頭に残り、疑問文の最初の単語にあわせて、「Can で聞かれたら、can で答える」「Are you で聞かれたら、I am で答える」などがルールとして定着していないのであろう。

そこで、Can you～? で聞かれて、Yes, I do.と答えている状態はどうすればよいのか。本研究では、明示的にドリル的活動を帯活動として行い、何度も耳にすることで分類2の応答を文法的にも正しく言うことができるのではないかと考え、次のようなリサーチクエスチョンを設定した。

Q1: 明示的にルールを示し、ドリル的活動を帯活動で行うことで、Yes/No 疑問文への分類2の応答が増えるか。

Q2: Yes/No 疑問文への分類2の返答に文法的間違いは減るか。

III 研究方法

1 対象者

本研究は、2021年度の学年末に実施した。調査対象者は、2021年度の公立小学校5年2クラスと6年3クラスのうちドリル的活動の帯活動を行った前後にインタビューテストを行った30名の児童である。

2 ドリル的活動の実践

インタビューテスト実施後、分類2の返答においてAre you～?でもCan you ～?でも答えがYes, I do.になってしまうため、「Are you～で聞かれたら、Yes, I am./No, I'm not.と答え、Can you～?で聞かれたら、Yes, I can./No, I can't.で答える」と明示的に児童に説明し、毎時間授業の最初の5分間で、「ぱっと答えようレッスン」と称して、5問の質問をして回答をすばやく言うドリル練習を行う。図4は、「ぱっと答えようレッスン」の1回目の内容である。ALTが文字を見せずに1. Do you like music?から5. Are you hungry now?まで児童に尋ね、各自声を出して答えさせる。その後、スライドで文字を見せながら、授業者が疑問文の最初の単語が、答えに呼応してでてくることを教えながら口頭練習を行っていく。8回のレッスン終了後、再度、インタビューテストを行い、その変容を調べることにした。

図4. ぱっと答えようレッスン1



IV 結果と考察

1 各分類における割合の変化(リサーチクエスチョン1に関して)

ぱっと答えようレッスンを実施する前のインタビューテスト(事前)と、実施後のインタビューテスト(事後)の結果は、表5の通りである。分類2の返答数はどの疑問文に対しても増加している。

5つのYes/No 疑問文全てが、分類2の数を増やしているが、どの数が減っているかを調べてみる。疑問文①②は、無回答の数が減っている。疑問文③④は、分類1の数が減っている。そして、疑問文⑤は、無回答の数が減り、分類1の数が増えている。この結果は、以下の様に考察することができる。疑問文①Do you like English?と②Are you hungry?は、答え方が分かるようになり、無回答が減った。疑問文③Can you play the piano?と④Can he fly?のCanの疑問文は、Yes.

表 5. Yes/No 疑問文への各分類の応答数と割合 (%)

ALTの質問	テスト	分類1	分類2	分類3	分類4	分類5	分類6	無回答	合計
①Do you like English?	事前	11 (36.7)	13 (43.3)	0	1 (3.3)	1 (3.3)	0	4 (13.3)	30
	事後	11 (36.7)	17 (56.7)	0	0	2 (6.7)	0	1 (3.3)	30
②Are you hungry?	事前	14 (46.7)	7 (23.3)	0	2 (6.7)	3 (10.0)	0	4 (13.3)	30
	事後	13 (43.3)	14 (46.7)	0	0	2 (6.7)	0	1 (3.3)	30
③Can you play the piano?	事前	18 (60.0)	7 (23.3)	1 (3.3)	2 (6.7)	1 (3.3)	0	1 (3.3)	30
	事後	6 (20.0)	20 (66.7)	0	2 (6.7)	2 (6.7)	0	0	30
④Can he fly?	事前	12 (40.0)	0	0	2 (6.7)	0	4 (13.3)	12 (40.0)	30
	事後	9 (30.0)	9 (30.0)	0	1 (3.3)	0	0	11 (36.7)	30
⑤Is this your pen?	事前	8 (26.7)	3 (10.0)	0	7 (23.3)	0	0	12 (40.0)	30
	事後	22 (73.3)	5 (16.7)	0	1 (3.3)	0	0	2 (6.7)	30

表 6. Yes/No 疑問文への応答 分類2の間違い

ALTの質問	テスト	分類2 回答数	うち、間違い数 (分類2に対する割合(%))	正しい回答	事後における 間違い回答(個数)
①Do you like English?	事前	13	0	Yes, I do.	
	事後	17	0	No, I don't.	
②Are you hungry?	事前	7	4 (57.0)	Yes, I am.	Yes, I do. (1) No, I don't. (2) No, I am. (1) No, I can't. (1)
	事後	14	5 (35.7)	No, I'm not.	
③Can you play the piano?	事前	7	6 (85.7)	Yes, I can.	No, I don't. (3)
	事後	20	3 (15.0)	No, I can't.	
④Can he fly?	事前	0	0	Yes, he can.	Yes, I can. (2) No, I can't. (1) No, he isn't. (1)
	事後	9	4 (44.4)	No, he can't.	
⑤Is this your pen?	事前	3	3 (100.0)	Yes, it is.	No, I don't. (2) No, I'm not. (1) Yes, I do. (1)
	事後	5	4 (80.0)	No, it isn't.	

とだけ言っていた状態(分類1)がYes, I can.という形での答え方(分類2)への習熟が進み、答えられるようになった。ドリルの実施により、canで尋ねられたらcanで答えればよいことが分かり、それを使うようになった。疑問文⑤Is this your pen?は、名前が書いてあるペンの絵を見て「これは誰のペンですか?」と尋ねられていたことが2回目のインタビューテストであるので理解でき、無回答が減り、ドリルの実施により、Is this ~?と問われたら、Yes, it is.と答えると分かったので、それを使うようになった。

これらのことから明示的にルールを示し、ドリル的活動を帯活動で行うことで、疑問文を聞いてどのように答えればよいのかが分かり、Yes/No 疑問文への分類2の応答が増える結果につながったと言ってよいであろう。

2 間違い数の変化(リサーチクエスチョン2に関して)

分類2における間違い(Yes, I am.と言うべきところを、Yes, I do.などと間違える例)の数とその具体例

を、ぱっと答えようレッスンの事前・事後のインタビューテストの比較を行った(表6)。最も変化が著しいのは、③Can you play the piano?に対する返答で、Yes, I can./No, I can't.と正しく答えられた数は7例から20例と増えているが、間違いの割合も85.7%から15.0%と減っていて、canで始まる疑問文に正しく答えられる度が高まっていることを示している。これは④Can he fly?に対する返答でも言えて、分類2で正しく答えられた数が0例から9例と増えている。間違いの例もheとIの主語を間違えたものが4例の間違いのうち3例と大部分である。canで尋ねられたら、canを使って答えるというルールは、分かりやすく、効果的に受け入れられたと考えられる。

一方、②Are you hungry?や⑤Is this your pen?のbe動詞を用いた疑問文は、理解が高まったものの、Are youをI amに変化させたり、Is thisはit isで答えたりと、be動詞を変化させることに加え、主語も変化させなければいけないことから、難易度が高かったと考えられる。②Are you hungry? Yes, I am.は事前・事後で回数は7例から14例と増えており、間違いの割合も

57.0%から35.7%と減っているものの、⑤Is this your pen?では、回数も依然と少なく、間違いが多い。

V まとめと今後の課題

明示的な説明を加え、ドリルの繰り返し練習をすることで、耳慣れていき正しく答えを返すことができるようになってきた。ルールがより理解しやすいものの定着が良く、文法としてしっかりと体系を理解していない状態では、小学校段階では限界があるようである。小学校段階では、文法を教えるから学習を進めるのではない。言語活動を通して、たくさんの例をインプットしながら、英語表現が使えるようにしていく。そして、児童の実態を把握しながら、その都度練習を加えていく。本実践は、その一環として Yes/No 疑問文の間違った返答を修正するために取り組んだものである。最初から明示的にルールを示し学習することを推奨するものではない。また、この短いドリルの練習を通していったん正しく返答できるようになっても、即興で質問をされた場合、相手の言っている意味が分からない場合など不安材料が多い場合は、正しく返答できなくなる場合も考えられる。

本研究では、自由な会話の中での Yes/No 疑問文への返答を見ることができていない。インタビューテストとして実施しているので、答え方を暗記して、覚えているものを発話している事実もあるであろう。Small Talk など自由な会話の中での、返答の様子についても、今後研究していきたい。

注

1. Written English Corpus は、以下の英語話者である小説家や劇作家のテキストで構成されている。Greene, Graham: *The Power and the Glory*; Hemingway, Ernest: *A Farewell To Arms*, *A Moveable Feast*, and *The Old Man and The Sea*; Maugham, Somerset: *The Razor's Edge*; Waterhouse, Keith: *Billy Liar*; Miller, Arthur: *All My Sons*; Williams, Tennessee: *The Glass Menagerie*; and Maugham, Somerset: *Collected Short Stories*.

2. Spoken English Corpus は、英語の母語話者である学生へのインフォーマルなインタビューの録音データで構成されている。Richards の勤める大学の学生 4 名が参加している。

3. 教員養成課程で外国語（英語）を専攻する大学 4 年生、男子 10 名で留学経験等のない者。トピックは与えず、5 分間日本語で対話し、その話の続きを次の 5 分間は英語で対話する形式で会話録音データを用いている。

引用・参考文献

- 犬塚章夫 (2023). 「小学生は Yes/No 疑問文にどう答えるのか—インタビューテストによる実態調査」『愛知教育大学研究報告 人文・社会編』第 72 輯, 41-48
- Richards, J.C. (1977). Answers to Yes/No Questions. *English Language Teaching Journal*, 31(2), 136-141.